



魅力いっぱい 心つながる 暮らしを楽しむ



新

年明けましておめでとうございませう。

昨年は、「地方創生元年」と称された年でした。「人口減少・少子高齢化」は、多くの地方都市が抱える共通の悩みですが、長浜が世界に誇る歴史や文化、美しく豊かな自然を活かし、都市ブランド力の向上・まちの活性化につなげていきます。

価値観が多様化する中、若者や子育て世代に選ばれるまちとなるよう、夢と希望を持ち子育てできる環境や子どもたちの教育環境の充実に力を入れ、同時に、誰もがいつまでも住み慣れたところでイキイキと暮らせるまちづくりを進めてまいります。皆さんのご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

さて、今年の新春対談は、歌手生活50周年を迎えられ、長浜にも縁のある加藤登紀子さんに登場していただき、長浜の魅力について、大いに語っていただきます。

バイオ大学から校歌作成の依頼があり、新しい琵琶湖や長浜のまちな

メーヂを込めて校歌「悠久の街」を作りました。



夕景の琵琶湖と竹生島

市長 校歌にいろんな思いを込めていただいているんですね。

加藤 校歌のイントロで、「空と大地がとけあう水辺 過去と未来が出逢う今」という詩を書きました。学生たちは、新しい学問を学ぼうと夢を膨らませて入学して来る、そして、ここ長浜の古い歴史と融合すること、より良いものができあがるというメッセージを込めました。

歌手生活50年
ーのびのびと自分のペースでー

市長 まずは、50周年おめでとうございます。加藤さんは今も精力的にライブやコンサートを開かれています。そのパワーの源は何ですか。

加藤 結婚する前まではものすごくプレッシャーを感じながら活動をしてきましたが、結婚後はのびのびと自分のペースで歌って来ました。農業と同じだと思っていますが、聞いてくださる人の心に種をまくつもりでひたすら営んで来ました。パ

ワーの源と言えるかわかりませんが、『暮らすことと同じだ』と考えるようになったことが続いていた一番の要因でしょうか。

心つなぐ故郷の歌

市長 加藤さんの名曲である琵琶湖周航の歌は、長浜市民にとっても思い入れの強い歌です。レセプションの最後には、必ずこの曲を皆で歌いますし、この曲を聞くと、どこに居ても「長浜」を思い出す市民が多いのではないのでしょうか。本当に郷土への愛着が生まれる歌ですね。

加藤 そうですか。そう言っていたら嬉しそうですね。故郷の歌があるってことは、素晴らしいことです。

琵琶湖周航の歌は、私にとって、大切な楽曲の一つです。発売時は、激動の時代であり、また大人と学生が激しくぶつかった時代でした。私の父と夫もそうなりとは仲良くなれないようでしたけど、二人とも「琵琶湖周航の歌」が好きで、「結局、似たもの同士じゃないの」

と安心しましたね。父と夫を結びつけるきっかけになった思い出の歌で、二人ともよく歌ってましたよ。

永々と人を魅了する風景

市長 加藤さんは長浜と縁が深いですが、長浜に対する印象を教えてください。

加藤 湖北野鳥センターから見た琵琶湖の風景がとても綺麗で、そして様々な表情があつて大好きです。長浜は、豊かな自然や環境が、変わらずあり続けるまちですね。

市長 私も神秘の島「竹生島」が浮かんだ琵琶湖の風景が好きです。竹生島は、実際にお参りするとすごく清々しい気持ちになりますし、湖畔からの夕景もその美しさに心を奪われます。時間や場所、季節によっても趣が変わり楽しいです。

加藤 その美しさを表現する琵琶湖周航の歌に続く新しい琵琶湖の歌を作りたいと思っていたとき、今から10年くらい前になりますが、長浜